

## ピョートル大帝とその改革に関する古典的スラヴ主義者の見解について

清水 昭雄

はじめに

古典的スラヴ主義は一八三〇年代末のロシアに生まれた思想で、西欧文化の無批判的な導入を以後は中止し、ロシア固有の原理に基づいてロシアに新しい社会と文化を創造しよう提唱した。この点で、西欧文化のロシアへの導入を一般に積極的に支持する西欧主義者と対立することになった。それ故、ロシアに西欧文化を初めて、大規模、かつ強制的に導入しようとしたピョートル大帝とその改革にたいする評価は、両者の立場を明確に区別するメルクマールの一つになった。古典的スラヴ主義者はピョートル改革の評価において一様に否定的であった

が、その否定の根拠や程度において、彼らの間にはかなりの相違が見られる。本稿以前の古典的スラヴ主義に関する様々な研究ではこの点に関する明確な記述が存在しなかつたように思われる。本稿は古典的スラヴ主義を代表する四人の思想家、イヴァン・キレーエフスキー、アレクセイ・ホミャコフ、コンスタンチン・アクサーコフ、ユーリー・サマーリンをとりあげ、彼らのピョートル観を具体的に示し、その相違を明確にするとともに、可能な限りにおいてではあるが、その相違が彼らの思想の持つ中心的問題とも深く関わるものであったことを論証しようとするものである。

四人の思想家の全集、あるいはそれに準ずるものから

の引用は、全集等の名称を番号を付し末尾にまとめて挙げ、当該の巻（ローマ数字）、ページとともに本文中に示した。

イヴァン・キレーエフスキー、一八〇六—一八五  
六

四人の古典的スラヴ主義者の中で、イヴァン・キレーエフスキーほど、西欧とロシアの相違を根源的に問いつめた人物はいなかった。一八三二年の『一九世紀』から晩年の『哲学の新しい原理の必然性と可能性』（一八五六年）に至るまでの彼の思想の歩みは、大きく捉えるならば、ロシアと西欧の相違がどこにあるかを、彼自身の問題意識において、より深く探究していった過程とみなすことができる。<sup>(3)</sup> 探究の答えとして、ロシアを構成する諸原理は西欧のそれとは異なる、という点では一貫していたから、西欧文明（キレーエフスキーの場合、ロシアとヨーロッパ、西欧は、社会制度等を含む全文化領域において比較されている。それ故、文化より広義の意味で文明という語を使用することにする）の強制的な導入者であるビョートルには激しい批判が予想されるはずであっ

た。しかし、実際にはそうでなかった。キレーエフスキーにおいては、ビョートル改革はロシアにおける分裂の始まりではなく、ロシア文明自身が含んでいた欠陥（危険性）がもたらした諸もろの結果の最終的表現でしかなかった。

『ヨーロッパ文明の性格、ならびにそのロシア文明にたいする関係について』（一八五二年）は、ヨーロッパ文明（ギリシア、ローマを含む際にはヨーロッパ、西ローマ帝国の滅亡後に成立した国々を指す場合は西欧と呼ぶ）とロシア文明の相違を全面的に検討したものであったが、その初めの部分に、ビョートルがリガの新造船上で乾杯した時の言葉が引用されている。そこでビョートルは、ギリシアに生まれた文明が、体内を回る血のように、イギリス、フランス、ドイツをへて再びギリシアに帰る前にロシアに入ってくると述べた。この言葉についてキレーエフスキーは次のようにいっている。この「文明への愛がビョートルの情熱」(①—II—175)であり、それが極端さを生んだ。ビョートルはロシアの救いを西欧文明にしか見いだすことができなかったのだ。

なぜビョートルにはそうとしか思えなかったのか。そ

の答えが論文の最後に書いてある。しかし、それは長大で精緻な、西欧文明とロシア文明の比較、ならびにロシア文明の優越性の論証と比べてあまりに短く、抽象的であった。ロシアに優れた文明が存在したのならなぜそのロシアが西欧文明を受容しなければならぬことになったのか。この重大な問題にキレーエフスキーは明確に答えることができなかった。恐らくこのことがキレーエフスキーの思想の持つ一つの弱点であったといえるだろう。<sup>(4)</sup>キレーエフスキーが答える様は苦しげである。実際彼はいう。これは「推測的な仮定」(①—II—219)であるかもしれない。キレーエフスキーによれば、ロシアの特殊性は、キリスト教の教義がロシアで持った表現の十全さと純粹さにあった。表現が十全で純粹であったということは、表現が表現される精神と同価値を持つことであった。ここに危険性があったと彼はいう。すなわち、内と外、内容と表現(形式)が最初に等価であったため、外部、形式に信頼を置きすぎ、それが習慣になってしまった。このことが、「生き生きとした精神よりも外的な形式への尊敬」(①—II—219)を生みだした。これがロシア文明における一面性、自己の形式の遵守への志

向となり、それが他の一面性、他者の形式、精神への志向を生みだしたと説明されるのである。

ここで示されたピョートル親とほぼ同様な見解が既に一八三九年の草稿『ホミヤコフに答える』で述べられている。この文章はキレーエフスキーがスラヴ主義者としての自己を最初に表現したといわれるものであるが、そこで彼は、西欧文明の根底にある合理主義を批判し、それと比較して優れているロシアの諸原理、ミール、慣習の同一性、正教会などを示した。しかし、ここに既に同様な問題、なぜこの優れた原理を持つロシアがその力を失ったのかという問題が存在していた。ピョートルについて次のように述べられている。「ロシア的なるものの破壊者、ドイツ的なるものの導入者ピョートルはいかにして可能であったのか。もしピョートル以前に破壊が始まっていたのなら、ロシアを統一したモスクワ公国はいかにしてこのロシアの命を押しつぶしたのか」(①—II—119)。問題は既にピョートル以前に存在したのである。しかし、キレーエフスキーは、その原因として、百箇条宗教令を定めた会議(一五五一年)を指摘するにとどまった。この会議は異端に対抗するという性格

を持っており、この教会における反目、すなわち、精神的、内的な関係の破壊が新しい物的、外的関係を呼び起こし、それが様々な過程をへて最終的にはビョートル改革につながっていくというのである。このように先に検討したビョートル観はここに形成されていたといえる。

以上でわれわれは、スラヴ主義者として自己の思想を確立していた時期におけるクレイエフスキーのビョートル観を見たのであるが、ここでいわゆるクレイエフスキーの改宗問題にも触れておかねばならないだろう。「改宗問題」というのは、クレイエフスキーが一八三二年に『一九世紀』を書いてから、一八三九年に『ホミヤコーフに答える』を書く時期までに、彼の思想において西欧派の見解からスラヴ派のそれへの移行が生じたというもので、その移行を明瞭に示す指標としてビョートル観の変化が挙げられている。本稿でこの問題を扱うことはできないので、次のことだけを指摘しておこう。ビョートル観の観点からは両論文の間には大きな隔たりがあるが、それは肯定から否定へという単純なものではなく、われわれが見たように、ビョートル問題そのものが背後に退いていくというものであった。ここに彼の思想の一つの

特徴を見ることができるよう思う。それは、物質的、外的な諸事実を規定する最大の要因を、精神的、内的な事実にもとめるといふ傾向である。ロシアと西欧の相違を追い求めてきた彼が最後に到達したのが「哲学の原理」であったことがこれをよく象徴しているように思う。クレイエフスキーにおいては、その思想の深まりにつれてビョートルの持つ意味は小さなものになっていったのである。

アレクセイ・ホミヤコーフ、一八〇四—一八六〇

ホミヤコーフはスラヴ主義を代表する論客であり、また一八四〇年代のモスクワで「ロシア史の基本的問題であるビョートル大帝の改革について激しい論争」が行われた際にそれに参加した、というチチエーリンの回想や、著名な歴史学者クリュチエーフスキーの言葉、「スラヴ主義者たち、特にホミヤコーフは、以前からの非難を繰り返しながら、カラムジンによってもほとんど指摘されなかった改革の非、つまり、改革が文明社会（中略）を人民の伝統と習慣から切り離すことによつて、ロシア人民の精神生活に亀裂を生じせしめたことを強く批判し

た<sup>(7)</sup>に触れるとき、われわれはホミヤコフこそがスラヴ主義陣営でビョートル改革について最も激しい批判を投げかけた人物であると考へたくなる。実際、ビョートル大帝の後世におけるイメージについての最新、かつ、最も浩瀚な研究書を書いたリヤザノフスキも、ビョートル改革がもたらした官僚的形式主義と、国家の圧迫にたいして、かつてない激しい理論的批判を行った者として「ホミヤコフとその友人たち<sup>(8)</sup>」を名ざしている。

これらの見解は十分な根拠を持っている。一八四四年の冬にスラヴ派と西欧派が決裂し、もはやサロンで論争することをやめ、論争の場がサロンから雑誌誌上に移行すると、ホミヤコフは一八四五年の論文『ロシアについての外国人の意見』を発表し、以後四〇年代いっぱい数篇の論文を発表した。これらの論文には共通した一つのテーマがあった。それは西欧文化の模倣的受容がロシアにもたらした病(分裂)を、ロシア固有の原理によって克服するように訴へることであった。そこでは、西欧文化の無批判な受容がもたらしたものとして、ロシア社会の上層と下層の分裂、知識と生活、学問と真の文化の分離が指摘されたり、西欧の社会構成原理とロシアのそれ、

すなわち、形式的合法性(契約)と精神的合法性(真の兄弟愛)が対比されたり、あるいは、分析と総合、形式主義(形式のみを外部から移入すること)、有機体への無機物の移入といった概念によって、異国文化の一般受容の不可能性が論証されたりした。<sup>(9)</sup>したがって、これらの考へは、全体として、西欧文化の強制的導入を強行したビョートル改革の批判を含蓄するものであった。

ところが、彼がビョートルとその改革に言及した部分に触れる時、全体が示すイメージとその部分が明確に述べるところは微妙に相違し、違和感を覚えさせることになる。また彼がビョートルについて述べた部分は少なく(全集中においてビョートルに言及した重要な部分ほぼ四箇所)、それらにおいても、見解が異ったり、評価の観点がずれたりして、全体として明確なビョートル像を結ばない。それらを具体的に見てみよう。

一八五一年の論文『アリストテレスと万国博覧会』では、既に指摘した概念「分析と総合」の観点からのビョートル批判が述べられている。ホミヤコフによれば、分析の多様な発展としての文化は、それを生みだした総合(生活)と内的な関連を持ち、両者は切り離すことが

できない。「分析と、それが生ずる総合との間の内的関連を理解しない者は哀れな誤りに陥る」(②—I—181)。ビョートルはまさにこのような人であった。彼は分析の果実のみを取り入れることができると考え、西欧の文化の全てをロシアに導入しようとした。「彼(ビョートル)は西欧の全ての形式を、最も馬鹿げたものさえも導き入れた。彼は触れてはならない多くのものを歪めた」(②—I—180~1)。この無理な文化導入こそが、ロシアの総合に分裂を生じせしめ、ビョートル以後のロシア文化の本質的貧困をもたらしたとホミャコフは指摘している。しかし、ビョートル自身については好意的な留保がなされている。ビョートルは分析と総合との内なる関係に気づかなかつたのであり、自分のしたことの結果には無意識的であつた。彼が自分の仕事に邁進したのは、「病的な揺さぶりによって眠れるロシアの思考を目覚めさせよう」と望んだ」(②—I—181)からであつた。

この概念装置による紋切り型のビョートル批判よりも重要と思われる言及を一八四九年の論文『フンボルトについて』に見いだすことができる。ここでも、ビョートル

ル改革が結果としては、ロシアに自己の過去を信じない個別的、分析的な力を生み出したと非難されている。しかし、次のような留保がなされている。「将来の歴史がどんなに彼を裁こうが(彼には多くの非難が投げかけられることは論をまたない)、彼が代表者となつたその志向が完全には誤りではなかつたことを歴史は承認するだろう。この志向が誤りとなつたのは、その勝利の時であり、その勝利は完全で十分なものであつた」(②—I—154~5)。この「志向」とはなにか。ホミャコフによれば、ロシア人は初め西欧から入ってくる全人類的なものには敵対的ではなかつた。しかし、様々な外国勢力、特に、ポーランドの大貴族やカトリシズム勢力のロシアへの敵意や狡猾さがロシア人の民族感情を硬化させ、全ての西欧のものにたいして、敵対的、排他的な態度を採らせるようになった。だがこの狭い民族的原理の偶然的な強化はロシア人の真の民族性にはふさわしくなく、それに反対する志向は代表者を持たないではいなかつた。この志向の良き側面の代表者がビョートルであつた。ホミャコフは全人類的なものの導入者としてのビョートルを否定はしなかつたのである。このことは次の例によ

く示されている。

『セルビア人へ、モスクワからのメッセージ』（一八六〇年）でホミャコフは次のように述べた。「ピョートル皇帝はわが国において大型船舶をオランダのものを見本に造りあげた（このことでは彼に功績と名譽がある）」（②—III—388）。しかし、ピョートルは何千という船舶の部品名を全てドイツ語で呼ばせた。このことによって、船乗りとして優れた素質を持っていたロシア人の船員は、船乗りではなく生徒になった。数年後には、海の勇者は半ば死んだようなドイツ語の辞書になった。この例を拡張してホミャコフはいう。「全ロシアの地はドイツ語の名称だけが響きわたる船の中のものになった」（②—III—388）。また他の場所でもピョートルは、純ロシア風な服装に固執した者のみならず、頼まれてそのような服を作った者をも死刑にしたり、流刑にしたとして非難されている。

以上のように、ホミャコフは、他民族からの文化導入に反対する彼自身の一般理論（有機体への無機物の導入、形式主義、分析と総合の關係など）にもかかわらず、西欧文化の一部をロシアに導入することを否定しなかつたのである。このことをよく示す一例を挙げよう。鉄道にたいする彼の見解である。一八四五年の論文『鉄道にかんするペテルブルクへの手紙』では、西欧から輸入された学問、芸術、慣習のいかなる要素もロシアのものと完全に融合したものはない、と明確に主張しながらも鉄道の導入を支持している。彼はその論拠の一つとして「必要」ということを挙げている。火薬がひとたび発明されてからは、いかなる国も軍事において火薬の存在を無視することはできない。同様に、鉄道の持つ輸送力を利用する国が現れた以上、鉄道のロシアへの導入は絶対に必要だとホミャコフは考える。彼は鉄道の敷設がもたらす当面の問題も必要のために忍ぶべきだといふ。「必要なものは、小さな有効性の尺度で計るべきではない」（②—III—109）とまで主張している。

鉄道を初めとする西欧のテクノロジーの導入はその程度が進むにつれて、ロシア人民の生活慣習を徐々に変化させずにはおかないものであった。しかし、ホミャコフはこの点にかんじて問題の所在をより深く問おうとはしなかつた。彼がエンジンの設計に没頭したり、英国での万国博覧会（一八五一年）の成果を喝采することがで

きた理由がここにあった。<sup>(10)</sup>このようにホミャコフのビョートル観は西欧文化導入の必要性と危険性の認識の間で揺れ動いている。

最後にホミャコフのビョートルにかんする最初の言及に触れておこう。それは一八三九年の『古いものと新しいものについて』と題された草稿で、クレイエフスキ一家で朗読された。ここではビョートルは、ロシアにおいて自己の利益のみを追及する部分的で個人的な力を強力に押し潰し、国家的統一を完成した人物として評価されている。ただビョートルについて非難されるのは個人の人格を全て国家に服従せしめ、「愛のあるところに力があり、愛はただ個人の人格の自由があるところにしかない」(②—III—28)ことを想起しなかった点にあるとされる。この高いビョートル評価と、低い正教の評価などから問題が指摘される草稿ではあるが、指摘しておかねばならないのは、強制的な国家統一の過程が避け難いものであったという見解が、ホミャコフにおいて後年まで保たれることである。<sup>(11)</sup>しかし、国家統一の完成者ビョートルという観点からの評価は以後一度も言明されることがなかった。

コンスタンチン・アクサーコフ、一八一七—一八六〇

四人のスラヴ主義者の中でビョートル改革に最も数多く言及し、また最も否定的な評価をなしたのは、その過激な言説から「スラヴ主義のヴィサリオーン(ペリンスキ—)」と呼ばれたコンスタンチン・アクサーコフであった。

一八五五年、ニコライ一世の死によって「暗黒の七年」が終り、アレクサンドル二世が即位することになると、アクサーコフは新帝に『ロシアの内部状況に関する覚書』を送り、先帝ニコライ一世下で行われたような徹底的な言論弾圧が全く必要ないばかりか、このような政府の側からの干渉はかえって革命の可能性を増大させることになる、と説得しようとした。その論拠は、まず第一に、ロシア人民は言葉の真の意味で唯一のキリスト教民族であり、自ら支配しようとする政治的自由は求めない。したがってロシアには革命の可能性は本来的には存在しないということであった。第二の論拠はアクサーコフ独自の国家観から説明された。彼によれば、国家と



は、神と隣人への愛（アクサーコフはこれを「内的な法（внутренний закон）」と呼んだ）を持たない者が存在するために必要とされる「外的な法」（внешний закон）」であり、それは「補助的手段」であった（いずれも③—76）。したがってこれに加わる人民の数が少ないほど望ましかった。「もし人民が君主に、人民が政府になるならば、その時には人民でなくなる」（③—77）。そして、このような政治形態は一人の君主に権力を集中する絶対君主制とされた。この点でもロシアの現存の政治形態は変更される必要はないのであった。第三の論拠は、人民が参加しない政府にとって、人民の見解を知る唯一の方法は言論の自由を認めることだという点にあった。そして、世論を受け入れるかどうかは政府の完全な自由委ねられるが、政府はそれを尊重する。これが両者の信頼関係であると彼は述べている。

このように政府と人民の望ましい関係（「支配の無制限的自由（③—96）」と「言論の自由」の両立）が可能であることをアクサーコフは指摘したが、彼によれば、この信頼関係はピョートル以前のロシアに現実存在したのである。ピョートルこそがこの関係の破壊者であっ

た。この点についてアクサーコフは次のように述べている。

ピョートルは偉大な天才であったが、今日までもその影響が続いている深い内的な悪をもたらした。人民が自己に忠実であり、自己にとどまり国家に干渉しなかったのにたいして「ピョートルに代表される国家は人民を侵害し、その生活、慣習に踏み入り、習俗、習慣、衣服までを無理に変化させた」（③—85）。ピョートル以後多くの人民は前の生活に復帰できたが、政府に仕える者、社会の上層の人々は人民から分離し、ロシアの原理、習慣から切り離された。ペテルブルクはこのような新しいロシア人が住むところである。この分離こそが悪の元凶である。これによって人民は被征服者、政府は征服者、君主は専制君主になった。新しい人々は西欧文化の模倣にふけり、ロシアとロシア人を軽蔑するようになった。この状態が一五〇年も続き、ついに人民までがこの悪に染まり始め、ロシアの原理が揺らぎだした。ピョートル的政策が今後も続けられるなら、人民は外的、政治的自由を求めようになり、革命的試みがなされるであろう。その時ロシアはロシアであることをやめるだろう。アク

サーコフの基本的ビョートル観はここに示されていると  
 いうてよいが、一層詳しくそれを追ってみよう。

一八四六年に完成したアクサーコフの『マギストル論文』  
 『ロシア文学とロシア語におけるロモノソフ』では、  
 ビョートル改革は、それ以前の一面的民族性の時代、つ  
 まり異国のものへの恐怖から自国の習慣にしがみついで  
 いる時代にたいして、逆の極端な一面的否定の時代をも  
 たらしたと主張された。この否定の時代をへて民族性の  
 必要が自覚される新しい時代の到来をアクサーコフは表  
 明している。<sup>13)</sup> ここには四〇年代の初めにアクサーコフが  
 サマーリンとともに学習したヘーゲルの影響が明確に現  
 れている。ビョートル以後の時代は弁証法的発展に必要  
 な否定の契機とみなされている。「われわれは西欧の文  
 化を受け入れた、それも理由なくそうしたのではなかつ  
 た」(④—II—26)。

しかし、四〇年代前半のホミャコフの影響<sup>14)</sup>、四〇年  
 代中頃のサマーリンの影響<sup>15)</sup>などに従って開始されたロシ  
 ア史の徹底的な研究がアクサーコフに彼自身のロシア史  
 観、従ってビョートル観を確立させた。それは一八四九  
 年頃には完了していたと推定することができる。この年

に書かれたと推測されている『ロシア史の基本的原理』  
 と題される未完の草稿には、アクサーコフが考えていた  
 論文のプランが項目別に挙げられており、そこに『覚  
 書』においてわれわれが要約した内容が明確に示されて  
 いるからである。その項目の幾つかを挙げよう。「リニ  
 ーリック招致以後の人民と国家」、「内的真実である人民  
 の定義」、「国家—外的真実」、「人民は約束を守った」、  
 「ビョートルを代表とする国家は裏切った」(④—II—1  
 1)。

実際これ以後、人民と国家の理想的関係を論証しよう  
 とする試みと、激しいビョートル批判が現れてくる。そ  
 の明確な表現をわれわれは一八五一年の『セルゲイ・ソ  
 ロヴィョーフのロシア史の第一巻について』のなかに見  
 いだすことができる。ここでは人民と国家との関係につ  
 いては次のように述べられている。九世紀の外敵の侵略  
 によって、それまで「内的法」によって生活していたス  
 ラヴ人は、「地上において純粹に道徳的な社会秩序のも  
 とで生活することが不可能であること」(④—II—59)  
 を知り、「外的法」である国家を外部から導入すること  
 にした。これがヴァリャグ人の招致であった。この国

家の役目は外敵から人民を保護することであつた。こうしてロシアには二つの原理、「内的法」によつて生活する人民とそれを保護する国家が成立した。ロシア史全体を貫いてこの原理が存在するが、「国家と人民が混じりあうところはどこにもなく」(④—1—61)、変化するのは国家だけである。「外的な力の戯れとしてのロシア史」(④—1—60)とアクサーコフは呼んでいる。したがつて、ここでは明確な形では述べられていないが、この関係の破壊者ピョートルが批判されているのは確実といわねばならない。

このようにピョートルは国家の側から人民の側を侵害したのだが、それは西欧化という形によるものであつた。そこでこの西欧化のやり方について批判もこの論文で明確になされている。ソロヴィョーフが自著の序文において、西欧化はピョートル以前から始まつておりピョートルはその志向の「後継者」にすぎないと主張したのでにたいして、アクサーコフは二つの理由から、ピョートル改革はたんなる継続ではなく「革命」と呼ぶべきものと述べた。第一にピョートルはそれ以前のように必要なものを西欧から受け入れたのではなく、西欧のすべてを

その細部に至るまで導入しようとした。これは「自由な借用」ではなく「奴隸的な模倣」である(④—1—46)。第二に、導入が暴力的な強制によつて行われたことである。さらにアクサーコフは、自分もかつては誤つてそう主張したと断つて、ピョートルをそれ以前の排他的な民族性の時代にたいする反抗者とみなすことは無意味であると述べた。なぜならピョートル以前のロシアにはキリスト教の兄弟愛が存在していたからで、民族的排他性にかえてピョートル以後に成立したというのである。

人民と国家という二分法によるロシア史とロシア社会の解明がアクサーコフの思想のひとつの柱なら、「内的法」によつて生活するロシア人民の優れた特質を明らかにすることが彼の思想のもう一つの課題であつた。ロシア人民が持つ共同体についての見解もその一つであつた。それは、五〇年代の初頭に書かれた『ゼームスキー・サポールについての短い歴史概観』に明確に述べられている(ちなみに、一八五七年五月一日付の週間新聞『世評』<sup>モルツァー</sup>のアクサーコフ論文では、共同体において見いだされた原理が民族間にまで拡大されている)。引用してみよう。「共同体は最高の、真の原理であり、それ

上の何ものかを発見する必要もなく、ただ進化させ、高めるべきものである」(④—II—279)。「共同体はこのようなに道徳的な合唱である。(中略)。共同体においても個性は失われず、全体の統一のために自らの排他性を拒否しながら、同じように自己を放棄した諸個性の統一のうちに、高次の純化された姿としての自己を見いだす。(中略)。共同体は人間精神の勝利のしるしである」(④—II—279)。

アクサーコフにあっては、ロシア人民の生活は自立的で、それ自身で価値のあるものであった。したがって、人民の生活慣習にまで介入し、服装にまで及んだビョートル改革は、国家と人民の望ましい関係の破壊のみならず、ロシアにおける自立的価値の破壊でもあった。

このようにアクサーコフのロシア史観、国家観、人民観においてビョートル改革は決定的な意味、それも極めて否定的な意味を持っており、彼が強くビョートルを批判したことは当然であった。

ユーリー・サマーリン、一八一九—一八七六

アクサーコフと彼の二歳年下のサマーリンはモスクワ

大学以来の友人であり、またともにホミャコフによってスラヴ派に導かれたが、そのビョートル観においてかなりの相違が見られる。

サマーリンは一八四三年にマギストル論文『ステファン・ヤヴォールスキーとフェオファン・プロコポヴィチ』を大学に提出した。ビョートルに見いだされ、重用された二人の教会人の研究であったが、ビョートル改革が扱われているのは、論文第二部の教会と国家の関係が問題とされた部分においてである。そこでは次のように述べられている。「正教世界での国家にたいする教会の正常な関係は、相互承認、完全な和解と規定される」(⑤—V—180)。これは教会の国家にたいする態度であったが、国家の側からもある一時期を除けばそうであった。ある一時期とはビョートル改革の時代である。しかし、サマーリンによれば、ビョートルに教会の圧迫を引き起こさせたものは、ロシアに流入したカトリシズムとプロテスタントの悪しき影響によるものである。サマーリンの具体的な記述を見よう。一種の教皇制の試みであるニコンの改革は失敗したが、カトリシズムの影響が強まるにつれて、彼の弟子達は師の試みを正当化

しようとした。分離派への迫害が始まるのはこの時期である。ニーコンの企図を支持する党派が生まれ、他の党派との対立が強まったこと、また「修道院内に強い共感を見いだしていた」(⑤—V—2441)分離派の存在が教会の状態を悪化させていた。それにつれて、宗教的フアナチズムが政治的なものに変化していった。この時期に即位したピョートルは「教会を敵対的な原理、本質的に国家にとって危険な力と見なすことに慣れてしまつた」(⑥—V—24415)。政治的、国家的性格を持つカトリシズムにたいして国家が反撃したのは当然のことであつたが、宗教の中にピョートルが支配に有効な民族的道徳性の根拠しか見なかつたことが事態をより極端なものにした。さらにピョートルの教会改革の理論的支柱になつたのはプロテスタンチズムの影響を受けたプロコポーヴィチであつた。

このようにサマーリンは教会改革の問題に限つてはいるが、改革の極端さは認めても、ピョートルにたいして同情的でもあつた。

論文を書きながらサマーリンに生じた懷疑、すなわち信仰と学問、信仰と理性の対立の問題が、ホミャコフ

によつて、信仰は理性によつて基礎付けられないという形で解決されると、サマーリンはスラヴ派に加入することになつた。しかし、スラヴ派への加入はサマーリンのピョートル観にそれほど強い影響を与えなかつたように思われる。一八四七年の『同時代人』誌の歴史と文学にかんする見解について<sup>(17)</sup>では、ペリンスキーが『一八四六年の文学概観』でスラヴ派に帰した見解に反対している。ペリンスキーはいう。スラヴ派によれば、「ピョートル改革はロシアにおいて民族性、したがつてすべての生活の精神をも殺してしまつた」、それゆえロシアはコトシーヒンの時代の半家父長的慣習にもどるべきだと。サマーリンはこれに反論する。スラヴ主義者の誰が、どこでそのようなことを主張したか。「いったい誰の頭に、ピョートル大帝という現象と彼の改革、一八一二年までのそれに続く事態が偶然的であると認めるような考えが浮かんだか。誰がそれらを歴史的に必然的だと認めなかつたか。」(⑥—I—100)

さらに一八五七年の『セルゲイ・ソロヴィョーフの論文「シュレーツァーと反歴史的方向」についての注』において、サマーリンは、ピョートル改革が理論的反対を

受けなかったというソロヴィョーフの主張にたいしてつぎのようにしか答えなかった。ビョートル改革が同時代人から理論的な反対を受けなかったという説は受け入れ難い。それらの見解はビョートルへの公的な賛美によって沈黙させられてしまったので、今後それらを示すものが発見されることを期待すると。

必然性の承認とその評価が直ちに一致するとは思えないし、またこれらの断片だから明確な結論を引き出すことはできないが、一つ確実と思えることは、サマーリンがアクサーコフのように激しくビョートル改革を非難しなかったことである。何が彼にそうさせたのか。われわれはこの間に答える手がかりを彼のツァーリ観のうちに見いだすことができる。

既出の論文『「同時代人」誌の歴史と文学にかんする見解について』でサマーリンは、カヴェーリンがロシア史を個人（人格）原理の発展の過程としてとらえたのにたいして、それを共同体原理（Общное начало）の発展過程ととらえた<sup>(18)</sup>。彼によれば、共同体原理はロシア史において、【一】血縁的統一に基づく共生の一形態である家族と氏族、【二】都市とその周辺の地域（最初は地

縁的統一、後には地方の教会を中心とした統一）、【三】国家的な共同体（全国的、教会的統一）、の三つの段階をへて変化してゆく。そしてここに注目すべき見解が現れてくる。この三つの段階では、それぞれにおいて必ず二つの契機が伴われる。一組ずつ挙げれば、氏族の成員の集りとその長、都市の民会と公侯、最後が全国会議、ドゥーマ（貴族会議）とツァーリである。この二つの契機は次のように説明される。「前者は全体を結合する原理の表現であり、後者は人格の表現である」（⑤—1—52）。後者が必要なのは、「共同体は彼（後者）を呼び出し、自らの上に置くことによって、自己の生命的な統一を生き生きとした姿で表現した。個々の人々は、自分の個人的全権を放棄するとともに、自らの人格を個人的原理の代表者によって救済した」（⑤—1—52）からである。サマーリンはさらに、共同体の長は単なる指導者、保護者ではなく、個人の使命と自由な個人の道徳的義務についてのより高次なキリスト教的概念を体現する人物であるとも指摘している。

このようにサマーリンにとつて、ツァーリとは国家に欠くことのできないものであった。国家の成員が自己放

棄できるのは、ツァーリにおいてその自己がより高次のレベルで補償、回復されるからである。ツァーリとは自己放棄の目的であった。

アクサーコフにおいては国家はいわば必要悪であった。ツァーリは一人でこの悪を担うべき者、身をつくして人民という神殿を保護すべき者であった。この人物は本来なら存在しないことが望ましかった。ビョートルがあたかも土足でこの神殿に踏み込んだことにたいするアクサーコフの怒りをわれわれは既に見た。しかし、サマーリンにとって、ツァーリは単に共同体の保護者ではない。それは共同体の共同性が維持されるために必要な価値の体現者であった。サマーリンにおいて、ツァーリ、ビョートルにたいする批判が弱く、またその存在の必然性が強調されている理由をここに見ることができないだろうか。

サマーリンのこのツァーリ観は、彼の現実的な社会変革のプログラムにも反映されている。一八五四年に領地で書かれた『農奴制とその公民的自由への移行について』という彼の農奴解放私案ともいべきものでは、人民の反乱の可能性を前にして、ツァーリ、貴族、農民の

三層構造において貴族階級に犠牲を強いる形でのツァーリと農民の調和的關係の樹立が目され、ツァーリ国家主導によるロシア改造が企図されている（この考えをサマーリンは終生失わなかった）。ツァーリの必要性への熱い思いがサマーリンのビョートル観に影響しているといえるであろう。

#### 結論

古典的スラヴ主義はまず西欧文化の無批判的な導入への批判から始まり、ロシア固有の優れた原理の論証へと深化した。イヴァン・キレーエフスキーの場合、ロシアの優れた原理探求の過程で、西欧文明導入を余儀なくされたロシアの脆弱性は、ビョートル一人に帰すべき問題ではなくなっていくた。しかし、彼はこの問題に明確な解答を与えることができなかった。

アレクセイ・ホミャコフは一八四〇年代後半の諸論文で、西欧文化の無批判的で模倣的な導入の危険性にたいして警鐘を鳴らした。そこには、西欧文化の強制的な導入者であるビョートルにたいする激しい批判がみられる。しかし、彼のビョートル批判は必ずしも首尾一貫し

たものではなかった。その最大の原因は、西欧で発明されたテクノロジーのロシアへの導入を否定しえなかったところにあったように思える。西欧文化の何が導入可能であり、またその移入されたものとロシア固有のものがいかなる関係を持つのかについての明確な問題意識を彼は持っていなかった。

四人のスラヴ主義者の中で最も激しいビョートル批判を行ったのはコンスタンチン・アクサーコフであった。しかし、彼の批判の力点は、西欧文化の強制的導入者としてのビョートルというよりも、国家と人民との間に於けるロシア固有の優れた関係の破壊者、また、それ自体で優れた原理を体現する人民の生活にたいする国家側からの侵害者としてのビョートルにあった。

ユーリー・サマーリンにおいてビョートル批判は弱いものとなった。その理由は彼のツァーリ観にあったと思われる。ツァーリの存在を必要悪とみなすアクサーコフにたいして、ツァーリをロシアという大共同体の維持に不可欠な存在と考えるサマーリンは、現実の政策においても、ツァーリ国家主導によるロシア改造に期待をかけた。

人民蜂起の可能性をまえに、スラヴ派内では、人民の自立性を強調し、アナキズム的な色彩を持つアクサーコフの思想と、人民とツァーリの結合を強調し、ツァーリ国家主導によるロシア改造をはかるサマーリンの思想に分化したが、ビョートル観の相違はこの事実をも反映してゐる。

① Киреевский, И. В., *Полное собрание сочинений*,

Под ред. Гершензона, в 2—х томах, Москва, 1911.

② Хомяков, А. С., *Полное собрание сочинений*, в 8—и томах, Москва, 1900—11.

③ Бродский, Н. Д., *Ранние славянофилы*, Москва, 1910.

④ Аксаков, К. С., *Полное собрание сочинений*, Под ред. И. С. Аксакова, в 3—х томах, Москва, 1861—80.

⑤ Самарин, Ю. Ф., *Сочинения*. Под ред. Д. Самарина, в 11—и томах, Москва, 1877—1911.

(1) 古典的スラヴ主義の時代を筆者は一八三八/三九年から一八六一年の農奴解放までとみなす。これはタイムバリエフの区分では第一期から第三期にあたる。Пимбев, Н. И., *Славянофильство*, Москва, 1986, с. 86—87を参照せよ。

(2) 古典的スラヴ主義全体を対象にしたり、あるいは複数  
の古典的スラヴ主義者を挙げて、そのビョートル観を比較



研究したものは、筆者の知る限りでは、リャザノフスキーの著『ロシアの歴史と思想におけるピョートル大帝のイメージ』(Riasanovsky, N. V., *The Image of Peter the Great in Russian History and Thought*, New York, 1985)のスラヴ主義者を扱った部分しか見当たらない。しかし、これも総論的なものであって、個々のスラヴ主義者の、ピョートルとその改革にたいする個々の具体的な発言を十分に吟味したものとはいえない。

(3) 彼の探究に関しては拙稿「古典的スラヴ主義者が提唱したロシアの原理について」、(イヴァン・キレーエフスキーとアレクセイ・ホミャコフの場合)、工学院大学研究論叢第二四号、一九八六年を参照されたい。

(4) キレーエフスキーは最後までこの問題を考え続けた。死後公刊された『断片』では、ロシア文明の弱体化の原因を一五世紀の終りから一六世紀の初頭にかけての、ビザンチン文化の混入にもとめてゐる。①—①—二六六。

(5) この問題にかんしては次の論文が詳しい。長縄光男、「前期キレーエフスキーの思想—『改宗』の内的契機をめぐるひとつの仮説—」、『ロシアの思想と文学』、金子幸彦編、恒文社、一九七七。

(6) Чичерин, В. Н., *Воспоминания*, Издание М. и С. Сабашниковых, 1929, с. 6.

(7) Ключевский, В. О., *Курс русской истории*, Москва, 1910, Часть VI, с. 268—9.

(8) Riasanovsky, *The Image*, p. 149

(9) 筆者の博士課程終了論文「スラヴ主義者 A・C・ホミャコフ研究—その思想の全体像」、一橋大学図書館「一九八三」ならびに、拙稿「スラヴ主義者、A・C・ホミャコフの思考法の特徴について」、一橋研究第八巻第三号、一九八三、を参照のこと。

(10) これにたいして、イヴァン・キレーエフスキーは独自の観点から西欧の産業社会に鋭い批判を投げかけていた。「産業が信仰と詩のない世界を支配している。これが今日、人々を結びつけ、引き離す。これが祖国を決め、身分を定め、これが国家機構の基礎にあり、諸国民を動かし、宣戦を布告し和平を締結し、風俗習慣を与え、科学に方向を与え、ついには、文化に性格を与える。人はこれに拝跪し、このために神殿を造営する。それは人々が欺瞞なく信仰し遵奉する真の神性である」。長縄光男・解題・訳・註、「イヴァン・キレーエフスキーの西欧哲学批判—『哲学の新しい原理の必然性と可能性』—」、横浜国立大学人文紀要第二九、三二—三三ページ。

(11) イヴァン・キレーエフスキーの反論を引き出すという目論見でホミャコフが書いたという説(前掲のキレーエフスキー全集中に併載された資料中を示されたエラーギン 〇記、Елагин, Н. А., *Материалы для биографии И. В. Каргелеского*, с. 63)や、当時はまだスラヴ主義思想が確立してゐらず、ホミャコフのこのような見解も可能

であったという説(グリーンズン説) Gleason, A., *European and Muscovite, Ivan Kireevsky and Origins of Slavophilism*, Cambridge, Massachusetts, 1972, p. 158) がある。またこの時期のホミャコフとキレーエフスキーの関係については次の論考がある。藤家壮一、「イヴァン・キレーエフスキー、スラヴ主義思想の萌芽」、北大「言語文化部紀要」、一九八四。

(12) 一八五四年の論文『キレーエフスキーの著作——ヨーロッパ文明の性格、ならびにそのロシア文明にたいする関係について——に関して』で述べられている。④—①—二二九

(13) 一八四五年に書かれた詩「ビョートル」でも「ビョートルは力によって人民の精神を抑えつけたと非難されるが、その時代はやがて去り、自由な時が訪れ、その時「おまえ(ビョートル)の人民はおまえを許すだろう」とうたわれている。③—一六五と八。

(14) クリストフは次のように指摘している。「コンスタンチンのスラヴ主義者としての生涯、いや恐らく成人してからの生活においてホミャコフほど大きな影響を与えた者はいなかった」。Christoff, P. K., *K. S. Askou, Princeton*, 1982, p. 115.

(15) サマーリンはアクサーコフにロシア史の厳密な研究を奨めていたが、一八四五年の二月の手紙では次のように述べている。「われわれはまだ何も、あるいはほんの少ししか証明していません。われわれの歴史について、人民について、過去の発展の特殊性についてわれわれが主張することは全て推測であって、論証されたものではありません」⑤—XII—一五六

(16) 一八四三年十月一五日付のホミャコフのサマーリン宛の手紙において、説得の内容の一端を知ることができる。⑤—V—六八(七一)

(17) Беннскии, В. Г., *Полн. собр. соч.*, в 13-и т., М., 1953—59, т. 10, с. 9.

(18) カヴェーリンとサマーリンの論争については筆者の博士課程終了補充論文、「スラヴ主義者と西欧主義者の論争、サマーリン対カヴェーリン、チチエーリン」、一橋大学図書館、一九八四、に詳しい。またカヴェーリンの「人格原理」については次の論文を参照のこと。杉浦秀一、「カヴェーリンにおける『人格』と『民族性』」、一橋論叢、第九巻第三号、一九八六。

(一橋大学大学院博士課程)